

宇野重規書評「ローマン・クルツナリック著『グッド・アンセスター—わたしたちはよき祖先になれるか』あすなろ書房刊」この一冊日本経済新聞 2021年11月20日朝刊を読む

将来世代のための思考とは

- (1)現代世界を覆っているのは、極端な「短期思考」だ。
 - (2)私たちの関心は、「今、ここ」に集中し、少し未来のことですら考える余裕がない。
 - (3)短期的に業績を上げることが求められ、前のめりになった結果、その先への想像力を失っている。
 - (4)累積する財政赤字が将来世代にいかにかかると、日々排出する温室効果ガスがどれだけ地球に破壊的な影響を及ぼすか、
 - (5)私たちは想像すらつかなくなっている。あるいは考えようもしない。
 - (6)そこで本書は問う。「よき祖先」にならないか、と。
- (1)この場合の「祖先」とは必ずしも血縁的な意味ではない。
 - (2)むしろ、未来に生まれてくる人たちに、どうすれば「よき祖先」と思ってもらえるか。
 - (3)将来世代に少しでも感謝してもらえるよう、私たちの発想を変えるための多くのアイデアを著者は示していく。
- (1)政治学者である著者は「ディープ・デモクラシー」を訴え、これから生まれてくる世代の利益を現在の政策に反映するための市民会議、世代間権利の制度化や、先進的な取り組みのための都市国家の可能性を展開する。
 - (2)あるいは気候変動や生物多様性の喪失を外側の境界線とし、食糧、住居、教育などの基本的必要を内側の境界線とした上で、両者の間に踏みとどまるための「ドーナツ経済」を提案する。
- (1)しかし本書の魅力は、どこか^{くわ}寓話的な、人類学的な英知が数多く紹介されていることである。
 - (2)世界各地の諸民族は、将来世代を考えるためのヒントを伝承や物語に託している。
 - (3)そこには「恩返し」や「贈り物」の例が^{あふ}溢れている。
- (1)思いがけず日本の例も出てくる。何世紀以上にもわたって技術を継承し、今日なお活躍するファミリービジネスがある一方、20年おきに遷宮を繰り返す伊勢神宮もある。
 - (2)江戸時代初期に城山地を作るために木を切り^つ尽くした江戸幕府は、その後期にはいき長く植林活動を続けた。やればできるのだ。

6. (1)長い時間軸(ディープタイム)を取り戻せば、私たちの人生の意味も変わってくるかもしれない。
- (2)そう、「よき祖先」になるために、私たちは行動を起こすべきなのだ。その意味が明らかになるのはずっと先でも良い。
- (3)今は共感の連鎖をどこかに感じられるだけで十分である。現在における希望のための書であらう。

<コメント>

日本企業や日本での社会的取り組みは「グッド・アンセスター」の世界一のデパートといえる。日本のよさは長期的視点でものごとを考えること。このよさを見事に理論化してくれた本書に感謝。本書はグッド・アンセスターの教科書といえる。是非、御一読を。

2021年11月28日 林明夫記